

# 台湾版“創氏創名”物語

岡崎 幸司

二〇〇五年一月、私ども夫婦に豚児が生まれた。日本名を孝彦（たかひこ）、台湾名を平義實（Ping, Yi-Shin）という。台湾名を持つのは台北で出生した愚息だけではなく、日本で生まれ育った筆者も同様である。台湾の出産事情や子育てについては別の機会に譲ることにし、今回は父子の台湾名にまつわる話を紹介したい。

## 創氏創名の経緯

ことは台湾での結婚登記が始まる。中華民國（台湾）籍の家内と結婚したとき、その意向から台湾においても登記することになった。台北での結婚式を終え、役所で登記しようとしたところ、担当者から「中国語の姓名で登記すべし。姓は中国百家姓の中から台湾で現存するものを選ぶこと。改姓は不可、改名は一回に限り可」という趣旨のことを言われた。日本名も漢字を使っているではないか、などと主張しても受け入れられず、中国語の姓名をつくらざるをえなくなった。郷に入っては郷に従え、ということと創氏創名に対する抵抗感は全くなかったが、突然のことゆえその場で対応できるはずも

なく、当日は登記を断念して早々と帰宅した。

帰宅後思案をめぐらした。台湾では同姓結婚せずが原則であるため、家内の姓である黄は使わないことに決めるが、具体的な名前が出て来ない。三国志に登場する曹操や劉備あたりについてみても、と思ったが、自らの器に鑑みて見送った。次に、『帰去来の辞』で有名な田園詩人陶淵明が頭に浮かんだ。田園詩人の生活は筆者の理想であるが、不惑で隠棲できるほどの経済的余裕はないし、文才もないことから没にした。

姓名とも決まらないまま時間だけが過ぎていった。辺りが静まり返り始めたころ、ふと思いついたのが、先祖は桓武平氏だという言い伝えである。真偽のほどはともかく、これは使えるかもしれない、と直感した。調べたところ、平姓は中国百家姓の一つと判明、同じ平姓でも意味するところは全く異なるが、先祖の姓を乗るといふ立派な（？）理由ができたので、迷わず平姓に決めた。名は適当に創作、日を改めて結婚登記を行ったところ、無事に受理された。登記後、平清盛も一興であったかと些か悔やんだが、清盛は熱病でうなされるイメージが

強いし、悪ふざけも少々度が過ぎると思いついた。

無い知恵を絞り急造して届け出た台湾名であるが、外僑居留証（外国人登録証）の異動事項に注記されているくらいであり、筆者に対しては常時日本名が使用される。しかるに、家内の国民身分証（IDカード）、住民票の配偶者欄などでは台湾名にされている。台湾名は創氏創名した本人にはなく、専ら家内に関連して使われているのである。創氏創名は果して何だったであろうか、未だによくわからない。

## 子供の命名

家内の懐妊を知ってから命名を考え始めた。女兒であれば、台湾名は才色兼備の若手女性経営者として令名高い陳敏薫女史に因んで平敏薫にしようかと考えていた。台湾を代表する女性モデルの一人であり、日本でも知る人ぞ知る林志玲の名前を拝借した平志玲も脳裏をよぎるが、アイスクリームを意味する冰淇淋と発音がやや似ているので平志玲はお蔵入りとした。

それからしばらくした二〇〇四年八月下旬、産婦人科医の先生から「子供は男児かもしれない」と告げられた。台湾の習慣によると医師は男児の場合のみ夫婦に知らせるのが一般的なので、「かもしれない」という条件付きであったが、誕生予定の子供は男児と確信した。平志玲だけでなく平敏薫もお蔵入りになってしまった。

先に日本名を付けることとし、中日辞典から

悪い意味のない漢字だけを選び、その中から姓名を合計した画数が吉になるよう漢字二文字の組み合わせを考えることにした。数ヶ月にわたる作業のすえ、命名案を五つに絞り込み、家内に説明して意見を聞いた。家内によると、世間一般に流布している画数の吉凶は参考程度に過ぎず、実際には生年月日なども関係するため姓名鑑定士の判断を仰がねばならない、とのことであった。世の中はうまくできているのである。そのため、豚児誕生後に義父母が姓名鑑定士に命名案の判断を依頼、先生の意見を拝聴したうえ、義父母・家内と相談して孝彦に決めた。

孝彦の名前は意外と好評である。同僚氏からは、中国系社会において最も大切な徳徳である「孝順」(親孝行)の「孝」と、才徳兼備の男性を指し男子に対する美称である「彦」を組み合わせた良い名前だと褒められた。思いもよらない説明だったので、孝彦という名前に対してはこのような解釈もできるのか、と驚いた。学生達からは、「孝彦」は「笑顔」と発音がよく似ており、明るくて良い名前だ、と言われた。「孝彦」と「笑顔」の発音が似ていることも学生達に指摘されるまで夢想だにしなかった。

愚息の台湾名は、桓武平氏の出とされる鎌倉武士岡崎四郎義實に由来する。四郎義實は当時で九十歳近い天寿、今なら百歳は優に超えるであろう長寿を全うした。長寿は台湾社会における重要な価値観の一つであり、愚息の長寿を願う老武将と同じ名にしたのである。また、家系伝説が事実ならば四郎義實が先祖という可能性

もあり、長寿祈願と合わせてその名を愚息につけるのもよかるつ、と愚考したことにもよる。

平義實という台湾名の評判は孝彦ほどではない。命名後に家内から、発音が「易死」(E:SI)に似ており不吉である、と批判された、家内は家内で、画数が多く名前を書くときに苦労する、と友人に言われたそうである。また、義實は台湾風の名前ではないため、何か深い意味があるのか、と聞かれることもある。そのような難しいことが浅学非才の筆者にわかるはずもなく、以前は冗談半分で「正義が実(實)現する」という意味だ、と嘯いていた。しかし、どう考えてもこじつけの域を出ないため、最近「先祖の名前だ」と説明することになっている。

内心では愚息に孝順を期待しているのである。家内は「孝彦」の名前が気に入っているように、平義實を平孝彦に変えたいと言いつつ、半ば皮肉のつもりで、改名は面倒だし、先祖に対して不孝である」とう返答をしたが、効果はなかった。

それもそのはずで、家内してみれば、顔すら見たこともない八百年前の俄か先祖に対して不孝だと言われても雲を掴むような話である。次は、「改名すると毎夜枕元に先祖の幽霊が出て来るぞ」と脅かしてみた。家内はホラー物が大嫌いなため多少の効き目はあったが、まもなくそれもなくなった。四郎義實の幽霊が出て来るわけではないし、ましてや日本幽霊の台湾出張など聞いたことがないからである(筆者個人としてはお目にかかりたいところであるが…)。

家内の改名要求は続いたので、ある日のこと、

四郎義實が鎌倉時代に九十歳近い天寿を全うしたこと、その長寿にあやかるべく愚息に義實と名づけたこと、などを繰々説明したところ、納得したのか諦めたのか、その後改名のことは言わなくなった。最初から命名理由を正確に説明しておけばよかった、と後悔した次第である。

### 愚息の呼び名

日本名と台湾名があるうえ、両国で言語が異なることから、愚息の呼び方は家庭内でも定まっていなかった。義父母・義兄夫婦はともに「孝彦(Siiao-yen)」と呼ぶが、義母はたまに「平將(Ping-jiang)」と呼ぶことがある。「平將」の「將」は日本語から入ってきた「ちゃん」の当て字である。家内は中国語読みで「孝彦」と呼ぶのが普通であるが、「彦彦」、「彦彦」と呼ぶのが普通であるが、「彦彦」、「彦彦」と呼ぶ場合もある。筆者は「孝彦(たかひこ)」と呼ぶが、「平將」と呼ぶかどうかである。

愚息は、日々中国語に囲まれて過ごしており、「孝彦(Siiao-yen)」と呼ばれることが多いため、「孝彦(たかひこ)」と呼ばれてもあまり反応しない。異国に住んでいるとはいえ、日本人父親としては複雑な心境である。

(おかざきこうじ・中華大学人文社会学学院  
副教授)